

論文 / 著書情報
Article / Book Information

論題(和文)	留学生の日本語教育における現状と課題 理工系留学生に対する取組から
Title(English)	
著者(和文)	仁科喜久子
Authors(English)	KIKUKO NISHINA
出典(和文)	留学交流, Vol. 17, No. 3, pp. 2-5
Citation(English)	, Vol. 17, No. 3, pp. 2-5
発行日 / Pub. date	2005, 3

留学生の日本語教育における現状と課題

理工系留学生に対する取組から

東京工業大学留学生センター副センター長 仁科喜久子

はじめに

東京工業大学（以下東工大）には二〇〇五年二月現在九七〇名の留学生が在学しており、日本人を含む全学生中の留学生比率は一三%と国立大学中で最も高い比率となっている^{＊1}。本学は、大学法人化の新体制下での中期目標として「世界的に認められる理工系総合大学・研究大学」を掲げてさまざまな試みを推進している。その方略の一つとして優秀な留学生を確保することは重要であり、英語のみでコースが修了できる国際大学院コースの充実が図られている。このコースは平成五年に設立され、現在は修士・博士あわせて一三〇名程度が在籍している。勉学上は英語のみで修了でき、日本語はサバイバル程度学ぶ

ことになっている。日本語という壁のために日本の科学技術は国際舞台ではハンディになっており、専門分野で優秀な留学生を確保するためにも日本語の壁は取り払うべきという考えからの企画であった。国際化計画の一環として、当然、日本人学生への英語教育も考えられており、二〇〇四年度はEnglish Yearとしてさまざまな事業が進められてきた。このように留学生の周辺は国際化にともなって日本語の負担が軽減されるように見える。

一方、先に示した九七〇名の留学生の出身国をみると、アジア圏が八五%、特に中国、韓国、台湾の合計は全留学生の五五%である。本学が英語力を強調する中、アジア圏の留学生にとっては第二・第三言語としての英語と日本語の能力を要求されるという問題が生じてくる。本稿では、東工大における留学生センター職員としての立場から、留学生に要求される日本語能力をどのように対処するかについて検討する。

理工系大学における日本語のニーズ

(1) 専門分野での留学生の使用言語

理工系大学における留学生にとっての日本語は、一部の例外を除いて専門分野の内容を表現するための道具である。研究内容を表現する手段として選ばれる言語の一つに日本語を用いるかどうかということになる。

村岡らは大阪大学、九州大学、東京工業大学において医学薬学系、理工系の博士論文・修士論文の使用言語について、一九九八年か

ら二〇〇二年の五年間に学位が授与された日

本人三五五七人、留学生六二九人の合計四一八六人を対象として調査した。^{※2} その結果次のことが明らかになった。

①医学系と理学系では英語使用率が高く、日本人・留学生とも医学系では九〇%以上、理学系では八五%程度が英語を使用している。②薬学系、工学系、農学系の分野では、日本人は日本語使用率が高い。留学生は漢字圏では日本語使用率が高く、非漢字圏では減少する傾向が認められる。

③英語母語話者の場合はどの分野でも日本語が流暢であつても学位論文は英語で書く。また留学生指導教員三六人に対しても質問をした結果、論文のインパクトファクターに有利という理由からも特に博士課程留学生に対して英語論文を書くことを要求する傾向があることが明らかになった。

(2)卒業後の就職と日本語能力

本学の国際開発に関連の深い、ある教授から「東南アジアの国々に行く、政府関係者から欧米留学組は、特に英語を介して母国と留学先の国とのリエゾンのな役割を果たす人材となる者が多いが、日本帰国組は日本語も不十分であり、人脈も少ないと言われる」という話しを聞いたことがある。英語はいまや世界共通言語となり、アジアのどの国民も英

語はかなりのレベルまで習得されている。一方、習得のレベルは、日本語は各国で高校な

どの第二外国語として学ばればはじめているが、英語と比較すると断然低い。アジア圏の学習者にも日本語はやさしい言語ではない。漢字圏と非漢字圏とではやや程度が異なるが、特に非漢字圏学習者には、日本に留学して日本語で勉学、研究活動を行うことはむずかしい。このような状況でありながら留学生の卒業後の進路希望を聞くと、帰国後日本の関連企業で働きたい、卒業後しばらくは日本の国内で働きたいという学生が多い。

中国東北地方では日本企業の進出と相まって、日本語教育が熱心に行われている。一例として大連理工大学における工学と日本語のダブルメジャーによる五年制学部教育が始まっている。^{※3} 大連市にある日本企業集団への就職が日本語教育への熱意にもつながっているという報告からも、卒業後の進路が開かれることは日本語学習の動機を高める重要な要素であることがわかる。

日本国内に目を移すと学部留学生は昨年までは日本語能力試験があり、また留学試験に制度が変わっても、入学後も単位取得は主に日本語によることから日本語能力についてはある程度の水準を保っている。大学院の場合、日本語能力の足枷がないのが利点である

とともに、いざ就職となると日本語能力のハンディが不利な条件となってくる。

東工大における留学生受入れプログラムと日本語

(1)東工大日本語教育プログラム

東工大における日本語教育はほぼ留学生センターに一括集約されている。このセンターでは、①大学院予備教育としての日本語研修コース、②学部正規授業としての日本語日本事情、③学部予備教育として日韓理工学共同受け入れプログラム、④短期留学受け入れプログラムにおける日本語、⑤大学院研究生および大学院生を対象とする日本語補講が現在まで運営されてきた。^{※4} これらのコースにおいても、留学生のほとんどが理工系であることから、科学技術日本語に代表されるような特別なコースを提供してきた。

(2)新しいプログラムと日本語教育

また、国際化推進の中で、新しいユニークなプログラムも次々と展開しつつあり、日本語教育も今までにないダイナミックな対処法で臨むことが余儀なくされている。

直近の例をあげると、中国における理工系

大学のトップクラスにある清華大学と東工大の合同プログラムが昨秋開始したことであり^{*5}。他大学でも同様の試みが行われているが、

本学のプログラムは大学院でナノテクノロジー、バイオテクノロジー、社会工学などの専門を学ぶコースとなっている。日本語・英語・中国語の三か国語で専門教育を行うことで、二一世紀の中国と日本の学術・産業界をリードする学生を養成すると唱っている。東工大から中国に留学することになる日本人学生は、中国語と英語で課程を履修する。一方、中国人学生の場合は、外国語である日本語と英語を学びながら専門の勉強をすることになる。現在清華大学において、日本人の専門教員による日本語での講義が行われている。清華大学内で日本語予備教育を受けた後に、このプログラムを履修するが、実際の講義の場では教員にとっても学生にとっても専門内容を理解して研究に至ることはかなり厳しいものだと聞いている。

少し遡るが、平成二二年度から開始したYSEP (Young Scientist Exchange Program) は、欧米およびアジア諸国からの学部三年を終わった学生を受け入れ、それぞれの専門分野の研究室に入って卒業論文指導を受けながら日本の生活を体験するというプログラムである。YSEP留学生は、理系ならではの研究

室単位の懇切な指導を日々日本人学生とともに受けることができる。一方、留学生センターは受入れとともに日本語と異文化理解の支援指導を行っており、サバイバル日本語・日本事情理解・文化体験の機会を提供してきた。YSEP以前にもカリフォルニア大学やワシントン大学などの特定の大学からの受入れはあったが、本学では研究室に所属して専門の教育を受けながら日本の生活を体験できる点がユニークで海外の関係大学からも高く評価されてきた。

現在、スウェーデン王立工科大学(KTH)との交流の準備もされている。KTHはこのプログラムで化学および化学工学の修士号取得と同時に日本語を学ばせることを目標として、日本の複数の大学との交流を計画している。責任者であるフルト(Furt)教授は「国際的なコンテクトで経験を積んだ一流の専門家となるために、欧米からは遠いと思われる日本で日本語と専門科目を並行して学ばせたい。日本語はスウェーデンで最も人気のある東洋の外国語であり、英語の読み書きができることのほかに、第三番目の習得言語として日本語が選ばれた」という。西洋とは違う文化環境での体験が国際的な視野をもった科

学者を育てるということであろう。これらの若い新鮮な感受性をもった学生た

ちが豊かな日本語環境にひたれるような学習教育環境をつくるのが私どもの大切な使命である。

遠隔教育による 日本語学習支援

(1) COEプロジェクトにおける 遠隔教育教材の考え方

前述のようなさまざまな教育方策の展開に沿って日本語教育においても対処がせまられている。

二一世紀COEとして採択された東工大のプロジェクトの一つに「大規模知識資源の体系化と活用基盤」があり、筆者は日本語教育専門家としてこのプロジェクトにおいて遠隔教育のためのコンテンツ作成を担当している。現在東工大はタイ・バンコクに分室があり、すでに専門教科の遠隔授業が行われている。また、フィリピンでも分室設立の準備が進んでいる。

COEプロジェクトでは、これらの新しい教育施策にこたえるべく、最新のITを利用した日本語教育のコンテンツと方法を世界に発信しようとしている。遠隔教育用の日本語教育のコンテンツと方法が確立すれば、学生た



ビデオでつくられた教材シリーズ

ちが国にいながらにして日本語を学ぶこともでき、また留学事前教育とアフターケアにも対応できる。

(2) 遠隔教育のための日本語教材の準備

現在留学生センターにおいて日本語学習支援システム「あすなろ」^{*6}を公開している。このシステムは理工系留学生在が日本語論文などを読むために中国語・タイ語・インドネシア語・マレー語で意味が理解できる多言語対応日本語読解支援システムとして開発されてきた。今後は講義理解も視野にいれて、IT技

術を導入することで映像、音声、テキストを搭載したマルチメディアシステムとして展開すべく開発中である^{*7}。写真は本学教授たちによる講義をビデオ撮影したものの一シーンである。この教材シリーズでは、地学、ロボット工学、情報工学、電子工学などの第一線の東工大教員が最新で高度な技術や理論を自然で、かつ、わかりやすい話し方で紹介する内容となっている。この講義を素材として、学習者にとって興味が続け、しかも学習効果のある教材を完成させるのが私たちの目の責務である。

まとめ

5

世界に開かれた日本の大学の地位を確立するためには英語教育を補強する重要性は言うまでもない。しかし、一方では、アジアの国の中でアジア諸国を味方につけて、国際競争力を高めるためにも隣人であるアジアの優秀な学生の能力に目を注がなければならない。日本国内の少子化に当面して、日本語を駆使できる優秀な留学生は我が国の企業にとっても貴重な人材となるであろう。このような人材の確保をするために必要な日本語能力とはなにかを注意深く見直すべきである。現在の教材の不備、教育者の不足、教育環境を見

直し、限られた学習時間と専門教育のカリキュラムの中で効率的な方法が真剣に考えられなければならない。グローバル化により国々の間に横たわる時間と距離が限りなく短縮される中で、理工系以外の留學生に対する教育も類似した状況にあるのではないかと推測する。私たちの試みが他の専門分野に在学する留學生に対する教育担当者の方々にも参考になれば幸いである。

【注】

*1 東京工業大学統計データベース。http://www.titech.ac.jp/about-titech/statistics.jhtml

*2 村岡貴子、仁科喜久子、深尾百合子、因原了子、大谷晋也による「種々の専門分野における留學生の学位論文使用言語」調査、日本語教育学会大会、二〇〇三年二月

*3 李篠平「理工系大学のための日本語教育におけるチャレンジャー中国大連理工大学日本語教科書の事例」三〇二頁、「専門日本語第五号」二〇〇三年

*4 東京工業大学留學生センター日本語授業案内。http://www.nyu.titech.ac.jp/nyu.html

*5 橋爪大三郎「清華大学大同プログラムがスタート」『東工大クオニクル』第三九二号

*6 「あすなろ」のホームページ。http://hinoki.nyu.titech.ac.jp/

*7 Nishina Kikuko: Asunaro CALL System Combining Multilingual with Multimedia International Symposium on Large-scale Knowledge Resources "LKR2004" pp.69-72